私の彼は寿司屋マニアなの?

葵さくらこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の彼は寿司屋マニアなの？

【Ｎコード】
Ｎ４６７１Ｎ

【作者名】
葵さくらこ

【あらすじ】
あらすじは…タイトル通りです。寿司屋マニアではないか？と思われる”彼”と、ほんとーに平凡な女の子”私”。二人が紡ぎ出す、夏の終わりの短い、短いショートストーリー。最後、静かーに話がまとまってゆきますｗ

その？

この車で「おまたせ！」と言われた時は、何かの冗談かと思った。

車の横には印刷ガッチリ「次郎寿司」、車種はハイエースＨ５０系（いわゆる「配達バン」）。仕出し弁当屋とかがよく使ってるタイプで、ご丁寧に「配達迅速　０３－〇〇－〇〇〇〇」なんて書いてある。

この番号に電話したらどこにつながるんだろう？

だって彼、寿司屋でもナンでもないし。

「寿司屋マニアなんだよね！」と陽気に説明してきたのだが、うーん、どこから指摘してやれば良いのだろうか…。。。

法的に問題無いのだろうか？いや、恐らくは無いのだろう。たぶん、モラルだけの問題だ。

「自分の車？」私はまず聞く。

「もちろん！」と、元気いっぱいな彼。無邪気に、そして爽やかに。

”もちろん”という言葉は　”当たり前でしょ？”　”聞くまでもないでしょ？”　という意味も含まれていると思うのだが、私は一体この状況のどこが　”当たり前”　なのかが、全く理解できない。一体、付き合い始めの女の子をこれからどこかに連れてくぜ！って大切な局面で、配達バンでやってくるヤツがいるのだろうか？

配達バンは業務用、デートに行くのは自家用車、このルールを彼は軽々と超越し、配達バンでデートに登場してきたワケだ。

「次郎ってのがシブいだろ？一郎でも三郎でも四郎でも五郎でも無いんだ！」

うーん、どう答えて良いのやら…。。私は可能な限り精一杯の笑顔を見せて、ただただ笑っていた。ああ顔の筋肉って偉大だ…。

走れば車だ。移動出来るのなら、車なら何でもいい。確かにそういう考えもあるのだが、これから海に行こうって時に、配達バンはどうしたものか…。

言ってくれれば、レンタカー代ぐらい出してあげたのに…。

ただ彼は、”これがカッコいい”　と頑なに信じた結果、それを見せびらかしたい子供のような気持ちで、私の前に登場したのだと思われる。

風になびく髪、満面の笑み。白いシャツの裾が風になびく。彼は太陽が良く似合う。不思議と日に焼けない彼。白い肌は、青い空を前にするとまるで雲のようだ。

長い指、細い腕、だけど肘から上の二の腕や、胸にはしっかりと引き締まった筋肉がついている。

彼と出会ったのは、川辺で肉を焼く集い（つまりバーベキューだ）の、ワタシの友達の男友達の会社の同僚の友達という、なんとまぁ普通だったら巡り合わなかったハズの遠い位置にいるハズの人と偶然出会ったワケで。

最初から彼は圧倒的に目立ってたワケです。

でもってなんとなく何か話しかけよう！と思い、「川好きなんだよねー」なんて、すごくつまらない発言したら、「オレは海も好きなんだよね！」と言って、そのまま海行こう！なんて話になって。

つまりまぁ、ワタシはまんまの彼の光線（こう呼ばせくれ！）にヤラれてしまったワケなんです。

だって、男前。ワタシは男前に弱い。

ただ、配達バンでやってくるとは…

（続きます！）

その？

車が走り出した。彼はエアコンを切り窓を開けた。風が心地良い。夏の終わり、風はもう、多少控えめな　”秋の風”　だ。

つまり話をまとめると、ワタシは彼の事、まだ何も分かっていないって事だな。何しろまだ手すら触れてない。肩すら抱かれてない。

ワタシが今、彼に対して唯一行ってる事、それは運転する彼の横顔を、ほんの少しだけ長めに眺める事ぐらい。助手席の特権。風景を見るフリをして、そのまま彼の横顔をぼんやりと眺める。

彼の細い指がハンドルを握る。左手の人差し指だけピンと伸ばしてハンドルを握るのがクセのよーだ。そのスラリと伸びる白い指、実に優雅でしなやか。

そんな感じで、彼が触れたものは不思議と全て高級なもののように見えてしまうのだが忘れちゃいけない、

これは配達バンだ！

今握るハンドルも配達バンとかでよく使われる、安素材で作られたと思われるチープなプラスチックハンドル。たぶん歯ブラシの柄の素材（それも旅館とかに置いてあるやつ）と似たような素材で作られているのだと思う（推測）

ただ、彼が握ると不思議と　”素敵な絵”　が出来上がってしまう

ところが、ワタシとしてもいささか納得ができない。光線だなぁと。光線の後光だなぁと。

恋ってスゴイなぁと思う。全ての判断基準を棒引きにしてしまう。

配達バンでやってきた時は、ゲ！と思ったよ。ただ、彼の透き通るような瞳やら、髪の毛やら、まぶたやら、指先やら、肩やら胴体やらを見ていたら（全部じゃん）だんだんそんな事、どうでもよく思えてきてしまった。

ワタシの中で勝手に何かがふわふわ浮かび上がってくる。それが体全体を支配し、指先の感触、足先の感触、髪の毛の先にまで、なんだか柔らかい空気が広がってしまう。もうワタシの目と脳は正常でないんだろうなぁとつくづく。

「喉乾いた？」と聞かれたので、「うん」と答えたら、湯のみが出てきた。

やっぱりなぁ…

「名店鮨処あつ賀の湯のみ！すごいっしょ！」と彼。

ワタシの中にいる”いろんなワタシ”が、その時一斉に葛藤を起こしたが、（名店鮨処あつ賀って何だかよく分からんが、恐らく寿司屋の名店なんだろう＋とゆーか、名店鮨処あつ賀を”皆が知ってる共用語”のようにサラリと言うのは何故？＋とゆーか、別に普通の湯のみでは？等）とりあえずワタシは「へー、スゴイねぇ…」と、なんともいやまぁ、当たり障りのない言葉で返した。いやぁ・・そんなに気の効いた事、咄嗟に言えんって…。

「あとおしぼりもある。」

「寿司屋の？」

「もちろん！」

…うーん。。。

（続きます！）

その？

彼は実にうれしそう。彼が言うにはこのおしぼりは清水市にある寿司の名店『多喜二』のものだそうで。それをわざわざ後部座席の一部に設置してある「おしぼりヒーター」に何本かストックし、必要な時に取り出して使っているとの事。

ちなみに彼が言うには、『使用用』と、『保存用』とでキチンと分けているそうで、今回使用してるのは『使用用』。

「おしぼりは使ってこそおしぼり」という彼の主義主張があるようなのだが、やっぱりマニア心理としては、多少は残しておきたいようで、二本程は必ず『保存用』として保管しておくそうだ。

「一枚だって同じおしぼりは無い」というのが彼の主張だが、そうか！？本当にそうか！？！？

彼が言うには他にも名店おしぼりとしては、菊水、久米鮨、北のれん、鮨寛、喜久鮨、吾妻、益善、かつ政等、全国に名だたる鮨名店のおしぼりを所持、保管しているそうなのだが、素朴な指摘をさせていただくと、おしぼりは「レンタルおしぼり屋」から手配してるハズだから、名店だろうが、凡店だろうが、そのヘンは大差無いのでは？…と正直、思ってしまう。

ただ、彼に言わせると、「おしぼりに電球の光を当てて、微妙に角度を変えた時の光沢とゆーか、繊維の照りとゆーかが、やっぱり普通の店とは違うんだよね！」と、これまた悦に入りまくっている。

人は夢中になると、何かが見えなくなという、いい見本のような気

がする。
あ、恋も一緒か。
まぁワタシはその手渡された湯のみに、これまた手渡された魔法瓶に入っているお茶（川崎市の名店　鮨さわで出してる粉茶だそうだ）を、どぼどぼっと注いだ。
「揺れるから気をつけてね。」
「うん」
ま、いい人ではあるんだよね。
「今日、君に飲んで欲しいなぁって思って。」
あ、ちょっとグッと来た。
ちょっとだけな。
（続きます！）

その？

「お寿司よく食べに行くの？」ワタシは聞いた。

「小さい頃はよくね」

「最近はあんまり行かないんだ？」

「あんまり最近は行かないかなぁ…。小さい頃はよく連れて行ってもらったんだけど」

「誰に？」

「兄貴」

「え！お父さんじゃなくて？」

「１２歳離れた兄貴がいてさ、寿司職人目指してたんよ。でもって修行中も、他店の味盗むって言っては、親父から借金して名店の寿司を食い歩いていた。その金は大物になってまとめて返す！とか言って」

「え？実家お寿司屋だっけ？」

「いやいや、ぜんぜん普通のサラリーマン。別に金持ちじゃないよ。普通の家庭なのにサ、突然兄貴が寿司職人になるって言い出して。兄貴、言い出したら聞かないヤツで。最初親父も猛反対してたけど、

だんだんその情熱に”流された”とゆーか。気がつけばあいつ、老後の蓄えとかまで切り崩して兄貴の寿司代払ってやってんの。さすがにもうそんな事してないけど」

「それに強引に付いて行ったって感じ？」

「そうそう、相当ダダこねて」

「お寿司屋マニアになったのもお兄さんの影響？」

「まー、そんな感じ」

「自分は寿司職人になろうって思わなかったんだ？」

「思ったよ。兄貴の後に続きたかった。兄貴の夢の後を追いたかった」

「けどね…」と彼は続けて、左手の指手のひら全体をぱっぱっと開いたり閉じたりした。

人差し指だけが曲がらない。

「左手の人差し指が曲がらないんだ」彼は説明した。それはその部分だけが人体の一部である事を忘れたかのような振る舞いだった。

気付かなかった。

（続きます！）

その？

私が”優雅”だと感じた”ピンと伸びる左手の人差し指”には、そういった事情があったのだ。手のひらの開け閉めに合わせて多少前後はするものの、人差し指自体はそこだけが固まったかのように、ほとんど動きを見せない。

先天的なものだろうか？後天的なものだろうか？

「だから自分は寿司は握れないと思った。そして諦めるしかなかった」

私は事情を深く聞けなかった。この指は単なる”不自由”ではなく、彼を夢を彼から遠ざけてしまう要因になってしまっていたのだ。

「おーい！あんまり深刻に捉えないでくれっ！」

彼はそう言った。笑顔で。ただそれは、楽しい時に見せる単純な笑いとは違い、何かを抑えた時に見せる、悲しみを帯びた笑顔のようにも見えた。感情的に何かを越えた時に見せる笑顔、割り切った感情から生まれる諦めに近い笑顔。

「結局、ウチで寿司職人になれたのは兄貴ただ一人」

「ふーん」

私は彼の横顔を見つめる。その笑顔に少しだけだけど、救われたような気がした。

「もう死んじゃったけどね」

「え…」

「うそうそ、まだ生きてるよw」

私はこのわずか数秒の間に、安堵やら驚きやらをぐるんぐるん回りながら、最後はようやく安心出来たよーな。ほっとしたよーな。

「ちょっと寄りたいところあるんだけど、いいかな？」彼は道を切り替えた。目的の海岸の少し手前、別の海岸に続く別の道。

私は窓の外を見た。

私がいつも”海辺の空の色”と呼んでる空が、その先に見えた。海辺の空は、普段見ている空とホンの少し色が違う。海が見えていなくても、空さえ見れば海が近づいているという事が雰囲気で分かる。なんとなくだけど。何故だろう？海に反射する日差しを空が受け止めるからだろうか。

潮の香りと波の音が近づいてくる。

懐かしい香り、柔らかい香り。

海はいろんなものを呼び起こす。

私はゆっくりゆっくりと目を閉じ、耳と体で全体でそれらを感じ取った。

海が近づいている。

（続きます！）

その？

海岸沿いに車を停め、私たちは砂浜に降りた。

海だ。

ざくざくと砂を踏む度、心地良い感触が足先から伝わる。この感触、すごく久しぶり。

私はちょっと待ってと声をかけ、履いていたミュールを脱いだ。素足だ。裸足で踏みしめる砂は、なんだかちょっとだけ恥ずかしそう。遠慮気味に熱を帯びた砂の温もりが、私の足元に伝わる。

「オレこの季節、一番好きなんだよね」

少しだけ秋の淡色に染まった空を柔らかく見上げながら、彼はそんな事を言った。秋を迎える準備をしているような空。空は少しだけ遠慮気味に微笑む。

彼は澄み切った潮風を体全体で感じ取るように、ゆっくり立ち止まり、ゆっくり背伸びをした。彼のしなやかな指先が、透明な秋空へと溶け込んでゆく。秋がその一部を風景として迎え入れるかのように。

「私も」と言いたかったのに、何だか言葉が上手く出てこなかった。かわりに「ふーん」とだけ答えた。私もこの季節、一番好きなのに。

海にはもう海水浴客の姿は見えなかった。店を閉じたレストハウスが何件か軒を連ねる。

水辺で遊ぶ子供と母親がチラホラ。そして一部のサーファーだけが、波への心残りを残すかのように、まばらに残るだけだった。

普通サーファーは、昼になるともう引き上げるらしい。いい波は朝方に来るからだそうだ。ふーん…。

「アレがオレの兄貴」

「へ？」

そこには背の高い若者（小さくてよく見えないがなんとなくそう見える）が、波を待っていた。お兄さんって、若く見えないか？どう見ても年下にしか見えない。

「お兄さん、サーファーなの？？？」

波が来た。上手く乗れない。その背の高いサーファーはすぐにパシャンと飛沫の中に消えた。あんまり上手くないみたいだ。

柔らかい潮風が海辺全体を流れる。

潮風のヴェール。まあるい風、柔らかい風。私たちの存在を確認するかのようなふんわりとした風が、彼と私の間を優しく通り過ぎてゆく。

「心臓だけがね」

トンッと心臓の音が鳴るのが聞こえた。自分の体の中で。ちょっとだけ。

風がもう一度、彼の髪を揺らす。

「もう死んじゃてるんだ兄貴」

（続きます）

最終話

波音が響く。遠いように、近いように。

柔らかい旋律は、全てを包み込むように、優しく音階を刻んだ。指先で音色を感じ取る事が出来そうな程に。

何かを確かめるように。

彼は微笑んだ。その微笑の先にある複雑な気持ちは、澄み切った青空の先に、静かに吸い込まれて行った。ゆっくりとした柔らかい輪郭として。

「でもって兄貴、ドナー登録していたのね。その心臓を受け継いたのが、彼。あの頃彼、外出すら出来ないような感じだったんだけど、やっぱ若いからw　今はもう、ここまで回復して、こうして海に来ているってワケ」

「おもいっきりサーフィンするのが夢だったみたいで」

彼はそう言って、砂辺に腰をおろした。私もその横に、ちょこんと座った。

「彼はその事を知ってるの？お兄さんが提供者だって？」

「知らないw　普通知らされない」

波に乗る彼が、こちらに気づき、ちょっとだけ手を振った。彼もそれに応え、ちょっとだけ小さく手を振った。

「彼からすればオレは海好きのヒマな人に思われてるらしいよw」

彼は微笑んだ。

「時々こうして彼に会いに来るんだ。そして彼の笑顔を見る。そうすれば兄貴はまだ生きてるんだなぁと感じる事が出来る。実感する事が出来る。そして兄貴の死は無駄じゃなかったんだって感じ取る事が出来る」

私は何も言わなかった。言えなかったのかな？言葉が出てこない。こういう時に限って。私は彼の横顔や瞳、そして柔らかい頬や口元を、ただただ見つめているだけだった。

話を聞いていたかった。

「人生は上手く行かないから、上手く行くように出来てるんだよ」
と彼は続けた。

「僕は寿司職人になれなかったから、今こうしてここにいる。兄貴が死んじゃったから、彼は今、こうして波に乗れる。上手く行かない事が重なって、重なって、それでも全体として見れば、風向きは正しい方向に向かっていたりする。幸せな風下へ辿りつけるように、空と太陽はいつだって僕らに風を送り届けてくれているんだ。」

空と波と風。彼は彼らと会話するように、優しく言葉を紡ぎ出した。

「たぶんねw」

彼はちょっとだけ悪戯っぽく笑った。照れ隠しのように。そしてこう続けた。

「だから自分は今、ここで吹く風を体いっぱいに浴びて進んで行きたいんだ」

波音がまた響く。遠いように、近いように。

その言葉は凛とした力を持ち、淡く柔らかい秋の空に溶けこんでいった。迎え入れるかのように。包みこむように。

「ところでドナーの提供先をどうやって調べたの？」ワタシってばようやく口を開いたと思ったら、こんな質問で…。

「それは秘密w」と、彼。

寿司屋グッズの入手先といい、ドナー先の調査といい、この人は一体どんなルートを持っているのだろうか…？？？

「ホントは法的には、会っちゃいけないんじゃない？」

「まーねw」

ああ、つまらない質問をしてるなぁワタシ…。

ぴゅーと少しだけ強い風が吹いた。彼のシャツの裾が、ふんわりと舞い上がった。彼の髪が揺れ、私の髪も揺れる。彼の右肩が私の左肩に少しだけ触れる。初めて触れる彼の右肩。ホンの少しだけど。

「実年齢と体の老化年齢は必ずしも一致するとは限らないらしいよ」と彼は少しだけ具体的な事に触れた。彼のお兄さんはもちろん、波に乗る彼より年上。だけど、細胞の組織的には十分若い人への移植に耐えられたという。

「体格も近かったからね」と彼。

お兄さんも大きかったんだ。彼も背が高いし。家族みんな大きいのかなぁ。

「あの車は兄貴が修行してた頃のお店の。強引に無理言って売ってもらったw」と彼。ちょっと強引なところもあるのだろうかw

彼は立ち上がって、ぱっぱっとジーンズについた砂を払った。そしてゆっくり背伸びして、ワタシの方を向いた。空と波と風を背にして。

そして微笑んだ。

「以上で自分の自己紹介は終わり！人差し指に問題があって、寿司屋マニア、微妙にブラコン気味な弟な自分だけど…」

彼は続けた。

「これからも会ってくれますか？」

私は頷いた。

「こちらこそよろしくお願いします」

私は答えた。

今度は私の事を彼に伝える番だ。

（おしまい）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4671n/

私の彼は寿司屋マニアなの?

2011年10月5日21時16分発行